

## *Polite Fictions in Collision*（『虚構の礼儀作法』）について

藤 田 永 祐

### (1)

曖昧な言葉、意味不明の言葉は機能的にも精神衛生的にも好ましくない。身近に見聞きしているものにも見うけられる。たとえば「ソーシャル・ディスタンス」そして「社会的距離」。共に意味がよく分かるだろうか？「社会的距離」の自然な使い方は「自分は平社員だから社長とは相当な社会的距離を感じる」、そんな使い方だろう。居合わせる人と人の間の距離をいうのに「社会的距離」はあまり適切とはいえない。そもそも‘social distance’<sup>ネイティブスピーカー</sup>は今のコロナ禍を契機に創られた用語だから、英語母国語者にはもっと明瞭な意味をもっているにちがいないのである。わたしたちは social と聞くと「社会的」とか「社会の」が頭に浮ぶが、social がカバーする意味の範囲はもっと広い。‘Man is a social animal.’ は「人間は社会的動物である」と訳されるが、この「社会的」をより精確に置きかえると「社会生活を営む」になり、「人間は社会生活を営む動物である」となる。

「ソーシャル・ディスタンス」は「社会生活が営める距離」の意味だろう。居あわせる人々の間でコロナ菌が感染して行ったら社会生活が成り立たない。したがって感染を防ぐのに必要な距離の意味になる。「ソーシャル・ディスタンス」は「社会的距離」というより「社会生活上の距離」ではないだろうか。外来語というものは厄介なもので、理解しているようで肝心なところが往々にしてそうでないものである。

邦訳があまり適切でないために、本来の価値が世間一般に充分には理解されていない本が少なからずあるように思う。そんな本の一つとして小稿は、坂本

ナンシー・坂本示洋著 *Polite Fictions in Collision* (金星堂 2004年) を取りあげてみたい。

英語の教材には日本で教鞭をとっている欧米人が書き下ろしたエッセイが少なくない。その類の本で後世に残るだけの価値をもつものは、当然のことに、数少ないと思われるが、*Polite Fictions in Collision* は、そんな数少ない本の一つに数えられると思う。現時点でのこの本の知名度を知ろうとすると、手がかりになるのは先ずネット上の記事だろう。ネット上の応答をいくつか拾ってみると、

質問者 A

polite fiction とは和訳するとどうなるのでしょうか？

今日、英語の授業で、ネイティブスピーカーの先生は、日米は文化が違うから訳せないと言っていたのですが、とても気になります。よろしくお願いします。

〔ベストアンサー〕

回答者 A

的を射た訳とはいえない部分もありますが、人間関係を円滑にするための手段と言う意味で、強いて言えば「社交辞令」のことです。ただ、文化のちがいがから日本の社交辞令とは異なる面も多々あります。例えば、人の話を聞くと、日本では口を挟まず傾聴することが礼儀正しい態度と見られますが、欧米では相手の話に興味を持っている印にできるだけ質問することがよい態度と見なされます。

質問者 B

和訳をお願いします。

〔ベストアンサー〕

回答者 B

Every culture has it's [sic] own polite fictions.

あらゆる文化はそれ自身の思いやりのある嘘を持っている。

Whenever we want to be polite, we must act out certain fictions, regardless of the facts.

我々が親切にしたいときはいつでも、我々は事実にお構いなしに、ある嘘を行動に表わさなければならない。

For example, when you meet someone, you may or may not like him, but either way, you must politely pretend to like him.

例えば、あなたが誰かに会うとき、あなたは彼を嫌いかもしれない。しかしいづれにしても、あなたは上品に彼を好きであるように装わなければならない。

In such a case, Americans and Japanese share the same polite fiction that “You and I like each other.”

こんな場合、アメリカ人と日本人は、「あなたと私はお互いに好意を持っている」というある親切な嘘を共有する。

如上三つの英語の引用文に対する別のベストアンサー

回答者 C

すべての文化は礼儀正しくする。礼儀正しくするには当然その行動をする。例えば誰かに会ったときたとえ好きでも嫌いでもその人に礼儀正しくする。このような場合にはアメリカ人と日本人は共同に礼儀正しくする。

質問者 C

英語を訳してもらえませんか

“I was reacting to the American polite fiction that my wife is wonderful.”

〔ベストアンサー〕

回答者 D

私はアメリカ流の丁寧なフィクション（仮想現実、嘘）である「私の妻は素晴らしい」という流儀に従って対応している。

この本に興味を覚えた人は、先ず参考までにネットに当たってみるというのが今日のありそうなパターンである。そして世間一般のこの本に対する理解度が、ネット上の応答から推し測れるとするなら、ベストアンサーにうかがえるようなレベルでは、著書に気の毒な気がするのである。欧米人との交際にも仕事にも、海外での暮らしにも旅行にも、示唆され教えられるところが多い本だからである。

理解度が低いのは、この本に見合う邦訳がないことに主な原因があるように

思う。第一、本全体のキーワードでありタイトルにもなっている *polite fictions* という言葉が、今もって日本語に訳されておらず（この本の前身 *Polite Fictions*（坂本ナンシー・直塚玲子著、金星堂）が世に出たのは1982年である）意味が曖昧なまま今日に至っているのである。

今は *polite fictions* の *polite* だけに焦点を当ててみたい。先に引用したいいくつかのベストアンサーでは、*polite* の訳を「礼儀正しい」「親切に」「丁寧な」「思いやりのある」「上品に」と英和辞書に載っている言葉の中から見つけて、当てている。英文和訳の典型的な流儀であるが、いずれの訳もこの場合適切な訳になっていない。

*polite* は *Oxford English Dictionary* (OED) に *of refined manners, showing courteous consideration for others* とある。

他人<sup>ひと</sup>への思いやり、丁寧さ、礼儀正しさ、などを意味する日本語なら、広く使える（英和辞書に載っていない言葉も使える）ことが分かる。コンテキスト、コンテキストで *polite* の意味のニュアンスはバリエーションし、それに呼応して日本語も変えないと自然で適切な和文にはならないのである。

*polite* には、礼儀正しい、とか、親切な、とか、思いやりのある、ではカバーできない意味合いもあって、英和辞典にも、

『研究者大英和辞典』

She was just being polite. (儀礼的にそういっただけ)

『ランダムハウス英和辞典』

儀礼的な（失礼にならぬよう気を配っている、という含みがある）e.g. a *polite lie*

この *polite* は、他人<sup>ひと</sup>への思いやり（ないし、配慮）からする、の意味で a *polite lie* 「罪のない嘘」

*polite smile* の *polite* もほぼ同じ意味で、*polite smile* 「愛想笑い」

*polite* を礼儀の観念が入る日本語に置きかえる場合、

礼儀正しい

礼儀（作法）に適う、礼儀（作法）に則した、礼儀（作法）に外れない  
さらに言葉のニュアンスを延長すると、

礼儀（作法）上、礼儀（作法）として、

*Polite Fictions in Collision* の1章 (p.3) の一文 For example, when you meet

someone, you may or may not like him, but either way, you must politely pretend to like him. (たとえば、だれか人と会うと、その人を好んでいようといまいと、礼儀作法として好んでいるように装っていなければならない)

この *politely* は、礼儀(作法)として、の意味だろう。

さらに言葉のニュアンスを延長すると、

社交の心遣いとして、社交の作法として  
コンテキスト次第で上のいずれも可能と思われる。

*Polite Fictions in Collision* の7章で著者の坂本ナンシー女史は *polite* を「挨拶としての」と説明している箇所があるが、この「挨拶としての」は「社交の作法としての」と言いかえても大きくは意味が変わらないと思う。

先に引用した研究者大英和辞典の例文、

*She was just being polite.* (儀礼的にそういっただけ)

この「儀礼的に」も「社交の心遣いとして」と言いかえられないだろうか。

## 英文和訳と翻訳

高校はもちろん大学における英語の授業は、英文和訳でも和文英訳でも、英単語一語一語、語句一つ一つは、ほぼそれに相当する日本語があるという想定のもとになされているといってよいと思う。外国語の習得は母国語を基準にして励むほかに手がないから、それは避けることのできないプロセスである。しかしさらに運用能力を伸ばそうとすれば、母国語との対比から意識的に離れて、できるかぎり英語母国語者の視点から単語でも、語句でも、文章でも観る修練が要求されるだろう。

第一、英単語一語一語、語句一つ一つは、それに相当する日本語があるという想定自体フィクションでしかないケースが稀でないのである。

しごく分かりやすい身近な例をとると、間投詞としての ‘*please*’ は「どうぞ」ないし「どうか」に置きかえられる。だが言葉の重みが違うのだ。たとえば「どうぞ窓を開けてください」は礼にかなった物言いであるが、そのまま英語に置きかえて “*Please open the window.*” とすると、これはほとんど命令文といってよい物言いになってしまう。“*May I ask you to open the window ?*”の方が、まだ日本文に近いだろう。

もっと分かりやすい例をあげると、テレビの人気番組の一つ「何でも鑑定団」

に登場する鑑定家の中島誠之助の十八番<sup>おはこ</sup>のセリフ「いい仕事をしているねえ」を英語に置きかえることを考えると、“This is a good job.”とか、それに類する表現では用をなすまい。言葉の真髓を表現しようとすれば、たとえば“This is a work of excellent craftsmanship.”とでも訳すほかないだろう。

いわゆる *literal translation* に類するものは、こうしたケースでは、ほとんど誤訳といっても過言ではあるまい。

参考までに、英文を邦文にするのとは逆の、和文を英文にしたものに眼を向けてみたい。

川端文学を世界に紹介したサイデン・ステッカーの『雪国』の *English Version* の巻頭の数節から、*literal translation* から外れた訳例の二、三。

「駅長さあん、駅長さあん」「駅長さん、私です、ご機嫌よろしうございます」  
「ああ、葉子さんじゃないか。お帰りかい。また寒くなったよ」

“How are you?” the girl called out. “It’s Yoko.”

“Yoko, is it. On your way back? It’s gotten cold again.”

「駅長さあん、駅長さあん」が省略されている理由は簡単明瞭。こういうニュアンスの呼びかけは、英語になく、訳しようがないから。「ご機嫌よろしうございます」は“*How are you?*”と訳されている。そもそも「ごきげんよう」という言葉自体女性的イメージを伴ない、男性はあまり使わない。原文の「ご機嫌よろしうございます」に一番近い英語表現は、結局“*How are you?*”になってしまうのだろうが、実際のところ、両者のニュアンスが大きく異なるのは明らか。

鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に吞まれていた。

Low, barracklike buildings that might have been railway dormitories were scattered here and there up the frozen slope of the mountain.

原文の「寒々と散らばっている」の箇所であるが、英文は‘the frozen slope’（凍った山の斜面）となっていて、形容詞の「凍った（‘frozen’）」で「寒々

と」の代用をさせている。「山裾に寒々と散らばっている」と「凍った山の斜面に散らばっている」とでは、趣がかなりちがうのを否定できない。

以下は *Polite Fictions in Collision* の試訳である。

(2)

『虚構の礼儀作法』(1章、2章、7章) 試訳

1章 あなたとわたしは平等です

「妻は美しい」

わたしは、日本に来て間もないころ、共通の友人を通してアメリカで会ったことのある日本の若者から、電話をもらいました。

「つい先日僕は結婚しました。妻もほくも今度の土曜日にあなたを夕食にご招待したいと思っています」

「素敵だわ！おめでとう！ありがとう。喜んでうかがうわ。奥様にお会いするのを楽しみにしています」

「妻は美しくもなく、料理もそんなに上手くないけれど、どうぞおいでください」

わたしはショックを受けて言葉を失いました。どうして新妻についての不平をわたしに向ってこぼすのだろう？わたしと浮気するつもりなのかしら？そんな人とちっとも友人になりたいくはなかったのですが、すでに招待を受けいれてしまっていました。そこで一度だけ彼の家に行って、二度と関わりを持たないことにしました。

しかし彼の奥さんに会うと、驚くほど美しい人と知ってびっくりしました。彼の言葉を気の毒に<sup>1</sup>誤解していたのだと気づきました。彼は奥さんのことを

---

1 原文は That made me realize that I had misjudged the poor husband. 'poor' は 'husband' にかかる形容詞だが、意味上は「気の毒な誤解」であって「気の毒な夫」ではない。文全体にかかると見なすべき poor のこうした使われ方は決して珍しくない。

とやかく批判したのではなく、礼儀にそった振舞をしただけだったのです。

彼女が並外れて美しい人だったのが幸いしました。もっと普通の見た目の人であれば、わたしは自分の過ちに気づかずに、相変わず彼を嫌いづけていたでしょう。この経験からわたしは、自分が属している文化とは異なる文化の、礼儀にそった振舞を、いかにたやすく人は誤解してしまうかということを学びました。

### 「妻は素晴らしいユーモアのセンスの持主です」

もし彼がアメリカ人であれば、自分の妻をけなすようなことは言わなかったでしょう。自分の妻についてなにも言わずに、あなたに会いたがっているとだけ言ったでしょう。もし何か言うとしたら、好ましいことだけを口にしたでしょう。たとえば「妻は料理がとても上手くて、なにか特別なものをあなたに作ってさしあげたいと言っています」とか、「妻は素晴らしいユーモアのセンスの持主で、きっとあなたも彼女を好きになりますよ」とか。

とはいえ自分の妻について好ましいことを言うのは、日本人には自慢するように聞こえて、たしかに礼儀にそった振舞にはならないでしょう。日本人もアメリカ人も共に礼儀正しい振舞をしようと努めているのに、どうしてそんなに大きなギャップが生じるのでしょうか？

お互いの習慣がそんなにも多くの相違があるなら、どういう物言いをし、相手からは何を期待し、相手の言葉をどう解したらよいのか、知りようがないのではないのでしょうか？<sup>ポライトフィクション</sup>実際に暮らしていて、習慣上のそんな相違をみるうえで、わたしが「礼儀作法の虚構性」と名づけた観点からみるのが大変役にたつことを知りました。

### 虚構の礼儀作法

すべての文化にはその文化独自の虚構の礼儀作法があります。礼儀正しく振舞おうとすれば、事実とかかわりなく、わたしたちは虚構の礼儀作法を演じおおさねばなりません。たとえば、だれか人と会うと、その人を好んでいようといまいと、礼儀作法として好んでいるように装っていなければなりません。この場合日本人もアメリカ人も「友好的な間柄です」という虚構の礼儀作法を共



有します。

しかし多くの場合、日本人とアメリカ人は大きく異なる虚構の礼儀作法にそって振舞っているのです。先の結婚ほやほやの日本の若者の場合、「家内は愚妻です」という日本人の虚構の礼儀作法にそった物言いをしました。一方わたしは「妻は素晴らしい人です」というアメリカ人の虚構の礼儀作法の観点から彼の言葉を受けとったのです。

アメリカでは、たとえあなたが離婚を考えていたとしても、そのことを公にするまでは、礼儀作法上、あなたは自分の妻を素晴らしい人だと思っていることを仄めかすか、少なくとも、そう思っているのを否定してはいけません。

しかし、どうしてアメリカ人は自分の配偶者を誉めるのが礼儀に適うと思い、日本人はその反対を礼儀に適うと思うのでしょうか？このことは「妻は素晴らしい人です」とか「妻は愚妻です」といった単一の枝葉的な虚構の礼儀作法の観点からでは説明できません。もっと大きな、もっと基本的な虚構の礼儀作法をみて、それらが組み合わさって文化の枠組みを形成しているのをみなければなりません。そして、こうした基本的な、互いに密接にからみ合う虚構の礼儀作法が、論理的に一貫性のある心理的世界を作り上げ、無意識のうちにわたしたちが感じ、考え、行動するすべてに影響を与え、かたちづくっているのです。

通常虚構の礼儀作法は意識のレベルでは機能していないのを記憶に留めるのは大切なことです。虚構の礼儀作法はわたしたちが呼吸している空気のようなものです。なにか「妙なもの」がないかぎり、気づいて意識することはありません。自分と同じ文化に属している人々と意思疎通しているかぎり、わたしたちは虚構の礼儀作法を、当然の、当たり前のもので受けとっているのです。「自然なもの」と思いこんでいるのです。

わたしたちにとって「不自然な」礼儀作法のお返しを受けたとき初めて、わたしたちの礼儀作法とお返しの礼儀作法との対照性のうちに、わたしたちの振舞の背後にある礼儀作法の虚構性をみてとることができるのです。そして、礼儀作法の虚構性を意識することで初めてわたしたちは、わたしたちの文化とは異なる文化の人々の振舞に対する、往々にして間違った解釈を——わたしたちにはそれが「自然な」解釈に思えるのですが——自制することができるようになるのです。

## 平等であって劣っているのではない

アメリカ人にとって、もっとも基本的な礼儀に関する虚構の一つは「あなたとわたしは平等です」というものです。それに相当する日本人の礼儀に関する虚構は「あなたはわたしより上位にいます」というものです。この二つの虚構はときに重なりあいます。どちらの文化にあっても、自分が相手より上位にいるのを否定するのは、礼儀に適うからです。日本人の礼儀に関する虚構「あなたはわたしより上位にいます」から自ずと生じる、自分を相手より下位に置く虚構の礼儀作法が強調されるときはいつでも、日米二つの文化は衝突することになります。自分を下位に置くのは日本では礼に適いますが、アメリカではそうではありません。

もしわたしがなにか食べ物をおあなたに供して、あなたが「とても美味しいです」と言ったら、わたしは「いいえ、ちっとも美味しくなかないわ」とは言いません。わたしたちは平等なのですから、自分が供するというだけで、くさすことはしません。礼に則したお返しという言葉は「あなたが好んでくださって嬉しいわ」となるでしょう。

## 比較の物言いは避けるのが無難

もし「とても美味しいです」という代わりに「あなたは私より料理がずっとお上手です」とあなたが言ったとしたら、わたしは「いいえ、ちっともそんなことないわ」と言って、自分の方が上手であることを否定できるでしょう。しかしそうした比較の物言いは礼儀に適うというより、くだけた物言いに聞こえて、お世辞の言葉を欲しがっているように思われかねません。礼儀に適う言葉使いをしたければ、自分が劣るのを強調する比較の物言いは避ける方がいいのです。ですから「あなたは私より料理がずっとお上手です」より、「あなたは料理がとてもお上手ですね」の方が安全なのです。

はなしを自分の妻ないし夫についてのアメリカ人の話し方に戻すと、アメリカ人の基本的な礼儀に関する虚構が「あなたとわたしは平等です」とであると知れば、自分の配偶者というだけの理由で、妻ないし夫をけなしてはいけなさとされているのが分るでしょう。もしあなたが相手の配偶者に誉め言葉を言いたければ、自分の配偶者と比較する言い方はしない方がいいのです。「ご主人は

素敵な方ですね」とか「奥様は美しい人ですね」と言う方がよく、「うちの主人より素敵です」とか「ぼくの女房より美人です」は避ける方がいいのです。

## 地位のちがい

アメリカでは同席している人が自分より地位が高くても、地位のちがいをあまり強調するのは礼儀に適いません。その場合お互いの口の利き方にはわずかな違いが見られるかもしれません。たとえば相手が先生なら、あなたをファースト・ネームで呼ぶのに対し、あなたはその人を姓で呼ぶといったぐあいに。とはいえ、このこともすべてのケースに当てはまるのではなくケースバイケースです。日本語の敬語の使い方にみられるような厳しい言葉使いのルールがあるわけではありません。雇用主と従業員は「プリーズ」と「サンキュー」を共に口に合うものとされています。このことは先生と生徒、親と子供のあいだでも同様です。

もちろんストレスがつきものの日々の暮らしの中で、ときとしてこうした礼節のルールが崩れることはあるでしょう。とはいえどんな人であれ、総じて、相手の地位が低いからといって、一段とぞんざいな言葉使いで対応するのは礼儀に反するのです。アメリカ人の虚構の礼儀作法の基本は、どんなときでも「あなたとわたしは平等です」なのです。

## 2章 あなたと私は親しい友人同士です

日本に来て初めて来賓としての講演を頼まれたとき、催しを企画したメンバーのうちのふたりの方が、車でわたしを迎えにきて会場まで乗せていてくれる手はずを整えてくれました。ふたりはわたしを玄関から車へエスコートして、後部座席へわたしを案内すると、ふたりとも前の席に座ったので、わたしは会場までの道中独りで座っていました。

最初にわたしが覚えたのは、よそよそしくされて寂しい気持ちでした。「どうしてわたしの横に座らないのだろうか？わたしが嫌いなのかしら？わたしのどこがいけないのだろうか？」。こうした接待は礼儀に適った振舞にちがいないと自覚したあとでも、相変わず独りで座っていて当惑感と居心地の悪さを覚えずにはいられませんでした。アメリカでなら、わたしは運転している人の隣に

座るか、後部座席にもうひとりの人と隣り合って座ったでしょう。

わたしが英語を教えている生徒たちとのクラスパーティがあるときも、いつも同じたぐいの経験をしました。生徒たちは一同かたまってテーブルのわたしの居るところから遠い位置に集まって、わたしの横にはだれも座らないのです。わたしは、人気がるでない教師のような気持ちでした。

主賓のそばに来るのを嫌がるのは、個人的に嫌われているのを意味してはいないのを、そうした経験をする時までには、もちろんわたしは知っていました。それは日本人の虚構の礼儀作法「わたしはあなたを畏れ敬っています」の顕れにすぎないのだと分っていました。それでも居心地がよくなかったです。なぜなら、理性的には分っていても感情的には、日本人と非常に異なるアメリカ人の虚構の礼儀作法「あなたとわたしは親しい友人同士です」の観点から、反応せざるをえなかったからです。

このアメリカ人の虚構の礼儀作法は、もっと基本的な虚構の礼儀作法である「あなたとわたしは平等です」から論理的に自然に生れでるのを思えば、容易に納得がいくでしょう。平等だと思えば、礼儀に適うためには親しい友人のように振舞うほかありません。一方を他方より上位に位置づけることができないなら、相手と距離を置くのは非友好的にみえるでしょう。ですから、できることといえば、お互いに近い仲であるかのように振舞うことになるのです。

アメリカの多くの慣習は、初めは人をまごつかせますが、最初に会ったときにアメリカ人はできるだけ早く形式ばった振舞ぬきに、親しい友人同士のように本能的に振舞おうとする、ということ一旦理解すれば、アメリカの慣習の多くに納得がいくでしょう。こういう振舞方を標準的な英語の慣用句で「打ち解ける（“breaking the ice”）」といいます。一方日本人は、親しい仲になるのに、形式ばった作法を長々と続けます。「打ち解ける（“breaking the ice”）」代わりに、「おもむろに親しくなる（“to melt the ice”）」と言ったところでしょうか。

## ファースト・ネーム

アメリカ人が初対面の人と打ち解ける一つの手法はファースト・ネームで相手の名前を呼ぶことです。アメリカ人は知り合うと日本人よりずっとひんぱんに、ずっと早い時期から、ファースト・ネームで相手の名前を呼ぶようになり

ます。

そんなアメリカ人でも相手の名前をファースト・ネームで呼ぶのが適切でなく、そうすると失礼になったり厚かましく思われるような場合があります。全体としてこれはデリケートな問題です。細かなルールがあるわけではありません。とはいえ、以下の二点を記憶に留めおくと役立つでしょう。

- (1) 相手の人に先導役を任せましょう。「あなたをジョージと呼んでいいですか？」なんて訊ねてはいけません。先方が自ら進んであなたをファースト・ネームで呼んだら、あなたもそれに倣うのです。たいていの場合、相手も自分も、どちら側でもファーストネームで呼び始めてかまわないのですが、厚かましく思われる場合もあるので、先導役を相手に任せるのが無難なのです。
- (2) 先導役を任せた相手がファースト・ネームであなたの名前を呼んでも、あなたは礼儀を<sup>おもんばか</sup>慮って先方の流儀に倣わないのはよくありません。先方が、ファースト・ネームで呼ばれるのを明らかに望んでいたり、期待しているなら、あなたはそれに応じるのがいいのです。日本人の虚構の礼儀作法「わたしはあなたを畏れ敬っています」にそった振舞は、アメリカ人の目には、礼儀正しいとは映らずに冷たくよそよそしい、ないし、卑屈で魅力に欠けるように映るおそれがあります。

## 年齢による区別をしない

アメリカ人の礼儀に関する虚構「あなたとわたしは親しい友人同士です」から生まれてくるものに、年齢のちがいを強調するのは礼儀に反する、というアメリカ人の考え方があります。

日本ではささいな年齢のちがいも重要視され、先輩・後輩関係と敬語の使用とによってそれは一層強調されます。そのために自分とほぼ正確に同年齢の人以外のだれとも、親しい友人としてくつろいだ間柄になることができないことになります。ほぼ同年齢の人以外はへりくだる関係か、それともその逆の関係か、どちらかしかないことになります。

アメリカでは子供と大変高齢の人を除いて、ほかのすべての人は、何歳から何歳までと明確に特定されてはいない「成人」という集団に属しているとされています。「わたしたちは親しい友人同士です」という虚構の礼儀作法は、「わ

たしたちの間には年齢によるちがいはありません」という虚構の礼儀作法を包含します。礼儀作法上、年配の人々は若々しく元気がある人々とみなされ、若年の人々は未熟ではない思慮ある人々とみなされます。アメリカではお互いに年齢の違いを無視するのが礼儀作法なのです。

いかに尊敬の念を示す意図があるにしても、高齢の人に対して年齢に関心をよせるのは礼を失します。定年をとくに過ぎている人でも、当人から触れてこないかぎり——高齢者の多くはそれを避けますが——年齢に関心を向けるのは避ける方が安全です。

アメリカでは、高齢の人が大変若い身なりをして若者のように振舞う理由の一つに、そうした事情があるように思います。アメリカの高齢者は、アメリカ人の虚構の礼儀作法——実際の年齢とはかかわりなく高齢者は気持の上で、元気で思慮分別のある成人の集団に属している——に則って振舞っているのです。

### スピーチに冗談を入れる

スピーチの始めに冗談を言うアメリカ人のしきたりは、初めて知り合った人に「親しい友人」のような気持ちになってもらう一つの手法です。共に笑いあえば、互いに友達で平等の間柄の気持になれます。

日本人の虚構の礼儀作法は「あなたはわたしより上位にいます」それゆえ「わたしはあなたを畏れ敬っています」というものなので、スピーチの冒頭に冗談を言うことはしません。かわりに弁解の言葉を述べて、自分が下位にいることを強調し、聴衆はまじめにうやうやしく聴くことで畏れの気持を表わします。

スピーチの始めに冗談を言うのは、日本語のスピーチのしきたりではないことをわたしは苦い経験を通して知りました。日本語のスピーチで、雰囲気盛り上げようと冒頭に冗談を言って、それがすべてしまうのはとても困惑させられることです。

最初は使っている日本語がおかしすぎて理解されないのだと思っていました。あとになって分ったのですが、わたしの日本語は完璧というにはほど遠いけれど、問題は文法や語彙の不完全さにあるのではなく、日本語のスピーチで冒頭に冗談を言うのは日本人にとって思ってもみないことなので、わたしが冗談

を言っているとはだれひとり思わなかったことにありました。そのために聴衆はひとりも笑わずに、うやうやしく当惑して黙って座っていました。

同じことが逆のかたちでも起こりえます。英語を教えている日本人の大学の先生が英語でスピーチする際、冒頭に「わたしの<sup>つたな</sup>拙い英語をご容赦ください」と言うと、外国人の多くは言葉通りに受けとって、「英語がそんなに拙いなら、どうしてスピーチなんかするのだろう？」と思うでしょう。そして、ちゃんとした英語でそのあとのスピーチが続けられたら、外国人たちは、偽善的に振舞っているとか、お世辞を言ってもらいたがっていると思うでしょう。

スピーチに対するこの二つの対照的な取り組み方でもっとも興味深い点は、わたしたち誰しものが、自分が属している文化の虚構の礼儀作法から抜け出すのがいかに難しいかを明かしている点です。スピーチの始めに冗談を言うのは、普通の日本人には理解されないと分かった後になっても、わたしは、スピーチの始めに知らずしらず冗談を言おうとしている自分にハッと気づくのです。英語のスピーチで始めに礼儀作法として弁解を述べるのは、しばしば誤解されるのを十分に心得ているのに、ついついその過ちを犯してしまう、そんな日本人の英語の先生を、わたしは何人も知っています。

わたしたちは、不適切だと分っていながら、いかにしばしば自分が属している文化の虚構の礼儀作法に、ついつい則って振舞ってしまうものかということを確認していれば、自分たちと異なる文化的背景と虚構の礼儀作法をもつ人々が、彼らの礼儀作法に則って振舞っても、わたしたちはもっと容易に共感を寄せることができるでしょう。

## 7章 質問につぐ質問

「質問をしすぎます！」

「アメリカ人は質問をしすぎますよ！」夫は数名のアメリカ人の観光案内をし終えると、すっかり疲れていました。「何でもかんでも質問してくるのです！あの建物は築何年ですか？あの五重塔は高さがどのくらいありますか？あの屋根はどうして四隅が反り上がっているのですか？そんな質問すべてに答えるなんてできないよ！」

わたしにはこうした質問のどれもおかしく思えませんでした。「礼儀に適



うようにと質問しているだけなのよ」<sup>2</sup>

「礼儀に適うようにですって！まるで教師がテストを課すみたいにはくに質問して、答えさせるのは無礼だと思いますよ！答えられないときは恥ずかしいでしょう。人をあんなに困らせない程度の思いやりがあってしかるべきだと思いますよ」

それでもなお、わたしには何が問題なのか分かりませんでした。「恥ずかしがる必要なんかないじゃない。ただ、知りません、って言えばいいのよ」

「アメリカ人は気安くそう言えるのですが、日本人は質問されて答えられないといい気持ちがしません。答えをみつけようと何かしなくてはいけないような気持ちになるのです。知りません、だけでは無責任で不親切に思えるのです」

## 挨拶としての質問

夫とのこの応答でわたしは、日本人とアメリカ人は、質問することとそれに答えることに、どのくらいいちがった気持ちをもっているかを知りました。アメリカ人はそうした質問を「挨拶」のつもりでして、おもに相手の国、職場、あるいは現に説明を受けているものに対して、社交の作法として関心を示しているにすぎないのです。質問したアメリカ人の方は無意識のうちに、質問を受けている方は、漠然としていようと詳しかろうと、好きなように応答してくれるものと思っているのです。専門のガイドでもないかぎり、格別の労をとって回答してくれるとは少しも思っていない。

## 思いつきの質問

日本人は挨拶として思いつきの質問をすることがないので、この種の質問をあまりにもまじめに受けとりがちになります。もし案内役がアメリカ人なら、会話のやりとりはこんな風になるでしょう。

---

2 この一文の原文は “They’re only asking to be polite.” 語り手のナンシー女史は ‘polite’ を「挨拶として」、言いかえると「社交の心遣いとして」ないし「社交の作法として」くらの意味で使っているのだが、女史の夫は「礼儀に適うように」の意味に受けとっている。



訪問客 あのお寺は築何年くらいですか？

案内役 知りません。建造されたのはずっと昔なのは確かです。

訪問客 あの高塔の高さはどのくらいですか？

案内役 おそらく四階建てのビルくらいでしょう？あなたはどう思います？

## 質問に質問で応じる

訪問客の質問に質問で応じるのは効果的な手法です。アメリカ人は、質問すればどういう回答が返ってくるか、少なくとも多少くらいは知っていることを、しばしば挨拶として質問することがあります。自分が知っていることを示すことができ嬉しいのです。まるで知らないことでも、あてずっぽうを言ったり、推測したりするのを嫌がることは先ずありません。

訪問客 あの家はどのようにして四隅が反りあがっているのですか？

案内役 お国ではあしたの家は見かけませんか？

訪問客 見かけませんね。東洋にしかありません。

案内者 面白い質問です。どうしてなのでしょう？

訪問客 樹木の枝のように反り返らせることで、自然を模倣しているのではないのでしょうか？

案内者 それはとても面白い考えですね。初めて聞きましたよ。

アメリカ人の礼儀に関する虚構が「あなたとわたしは独自の存在です」なので、アメリカ人はこの言葉を誉め言葉と受けとります。

## 本当の質問

もちろん時には挨拶としてではなく、本当の質問をしているときもあります。どちらであるかは容易に見分けがつきます。まじめな関心から質問しているなら、アメリカ人は同じ質問を別のかたちで問い続けます。

訪問客 あのお寺は築何年くらいですか？

案内役 知りません。建ったのはずっと昔であるのは確かです。

訪問客 秀吉の時代以前だと思いますか？

質問がまじめな意図のものでも、相手が行動を起こす前に、その必要があるかどうかを訊いてくれるものとアメリカ人は無意識のうちに思っています。

案内役 確かなことは知りません。調べてみましょうか？

すると問いかけている方は、どの程度まで追求したいかを相手に伝えることができます。

訪問客 いいえ、そんな必要はありません。大したことではありません。ふと、思っただけのことです。

あるいは、さらなる関心をもっているのなら、

訪問客 どこかでパンフレットを手に入れることができますか？

案内役 入り口のところで訊いてみましょう。

質問している人は質問を続けるのも止めるのも、自分で決められます。どの点で止めるか自由に決められます。

案内役 英語のガイドブックを千円で売っています。買いませんか？

訪問客 いいえ。その値段なら、要りません。

(又は)

はい。大変助かります。

## 親切のしすぎ？

アメリカ人は、相手が手助けしてくれる場合は、実際行動に移る前に、そのことを言葉で訊いてくれるものと無意識のうちに思っていて、それがアメリカ人と日本人の間の多くの誤解の根本的原因になっているのです。初めて日本に来たとき、あることが知りたくてちょっと人に訊くと、それが多くの人を巻き込んだ思いもしないひと騒動を起こすのを知って、ひどく驚きました。

たとえば日本人の知人に「歌舞伎の切符の手に入れ方を知っていますか？」と訊くと、知らぬ間にその人は知り合いに電話し、その知り合いが別の人に頼んで、私のための特別の切符を手に入れるように取り計らってくれました。わたしは、実際に手に入れたいかどうか訊かれていないので、その切符が見たい演目でなかったり、不都合な日だったりしました。しかしそんなに多くの人に多大な面倒をかけた以上、もちろん断ることができませんでした。問題はわたしの観点からすると、親切のし過ぎにありました。

## 問いかけは行動して欲しい仄めかしではない

日本人のペースはアメリカ人よりゆっくりしていると人は言いますが、この種の情況にあっては、アメリカ人よりずっと早いのです。どんな問いかけも、日本人は行動を起こして欲しい仄めかしと受けとるのを知るのにわたしは、長い時間がかかりました。アメリカ人は人に問いかけたとき、行動ではなく、ただ情報を期待します。もし行動を起こすにしても、それはゆっくり段階を踏んで起こします。

「歌舞伎の切符の手に入れ方をご存知ですか？」

「劇場の切符売り場で購入できます」

最初の段階はこれで終わりです。さらなる手助けが必要なら、次の段階に進むかどうかは質問する人しだいです。

「切符売り場の係りの人は英語が話せますか？」

「さあ、分かりません。わたしも一緒に通訳しましょうか？」

「いいえ、結構です。いつ観にいけるか分かりませんので。行ける時の切符の手に入れ方を知りたかったのです」

勿論ときによって、アメリカ人はあなたに切符を買ってもらって喜ぶこともあります。しかしその場合でも、アメリカ人は自分のために行動を起こしてくれる前に、そのことをはっきり尋ねてくれるものと思っています。

## 「私のペン見かけなかった？」

アメリカ流の問いかけは日本人には行動を起こして欲しい仄めかしと受けとめられるのを知ったので、問いかけたりしないように努めました。しかし、アメリカの文化に育てられ身についた習慣は、抜け出すのが大変むずかしいのです。日本人はなにか質問されると、実際に立って探す手助けをしないで、ただ質問に答えるのは、礼を失すると思うということを忘れて、ときどきわたしは考えなしに「わたしのペン見かけなかった？」と訊いてしまいます。すると夫が、そのときしていることを中断して、わたしのペンを探そうとすることを見てびっくりします。英語では「すまない、見かけなかったよ」そう答えるだけで、相手がだれであっても十分に礼に適った応えなのです。

しかし今では、しまいに夫がわたしに対しかんしゃくを起こし、「自分で探

したらいいだろう。人に迷惑かけるのはいい加減にしろよ！」と嘯みつくように言うとき、同情を覚えることができるようになりました。夫は日本人なので当然なことに、わたしが不当に要求ばかりしていると思っています（「わたしが何をしても、それをやめさせて、探し物の手助けさせてばっかいる！」）。しかしアメリカ人なら、わたしの夫は理不尽に怒りっぽいと思うでしょう（「なににも、立って探さなくたってすむことじゃない。簡単な質問をしただけなんだから！」）

異文化間コミュニケーションになると、「簡単な問いかけ」がそれほど簡単なことでなくなってしまうのです。